



俳諧
 乙部
 柯
 付合
 見習
 記

中卷

中村俊定文庫
 文庫 18
 85
 2



佛音之部抄

中付合

見略記



寓言解見習記



後俳諧不得道下と皮

教厚撰

従二位家隆

あよとえくあて溜の幸ふらん
むめ水とくもすくもあつや

前大納言家

ちうかいをものふりりふ
るのせまいある例乃あやん

七か大納言氏

やあれていけ輪まゆる車は
なまよこひのあすけいむ

西郷道師

ひろきかたもすまらぬ

海き海よこ海老海老のるま

長阿法師

身は取はらひあせえと

奉きき足うこゆあまた

お大将お

もちのりこけりく成なり

むらうらう娘へあらん

水戸藩成徳

車つゑのあらうあう

恋多は取ててもうそくわら

西郷道師

やの泣く嵐戸のあ

望まてもなまらぬん

おぬん

ゆまにこそ物や好むん

極楽をよこし野老あう

言昔は

集用状をうさるん人

病は血のあわれかあ

比栞昌

六日よちもおあ

あひのあひは

道徳好古傳

かたはる海を渡る 招木木の音

海草生まはる妻おらばおれ

かた 徳法師

おまの衣すそにぬきをり

佐保娘のまきあきととて

さき木田の武

秋風はもよおしをまらして

よの日の日乃好はあさき

ものものの喜の方よまきて

具足をこねて遊らうとて

大まかきわらうとておけき

いふ^{はる}見の根遠はちとあまといえ

梅の法師

子の日乃好はあさき

君代はさ藤とらふてと急はて

まき立一あまかたはちとて

三好節の山もあけて何とて

かた 西法師

うたとおまふすまののま

かたをまてあらぬはもあわ

かた 河由ま

生海草もそれぬ御佛の孫

かた酒戒ありひもあきといふて

なすはし

留万の取程の高きし
ぬまへくしとふあし引の山
とくしあゆみの肝あねえ
むねのおもひやうしあかん

高滝益翁

控しあはしよかきまおらね
又うららしくよわす十念

飯原貞因

ちいほあきあまのいし
もやあ早十日ものくれしあ
くらしあこの針とほ

ふあまあ法の塵をかきよ

首の骨うよるあまあ浦

糸清追ひくわのねい

せんしとすあまのあね

ちあきけえねあしと

あはしあ取し浄土雙六

鯨船やちああ海ようあむ

あ尾以船

松の精かうやうと現るあ

是はあ大げうあああああ

はあああああああああ

他のせう乃人のああああ

游氏女撰

のいそと地しれ日の秋あし

子度うつ衣の関よまこあそ

前田氏未定

琴の音かまきしああり

ふと首青の松風吹落亭

少おをる吟

ねほすまふ斗ふの閑山忌

唄唱その田おちまららし

松に遊舟

ふとりおままきの日くし

むくろ細はまきちをすちあらも

食阿任他

あふうしと祖の上もさん

浄福瑜よあふあとのさ

流ちれり代よすめお水入

ひんばりち二留のおよあさん

むれさ松のやをを取なり

おん野服之

子白のまよこ存しとせ

中岡のもり乃木陰の雨舎り

き舟やう乃山ほとまほ

を格ひりしと中とを周

二ふうりやれ名をせおらむ

石井代如自

くしも日なも同なりまけん
家法のもくしんも自わらむ
下戸乃多ある清らふの宿

二見氏一本

ほつふりしつわら初丁
ありくと尾花あれの手ひま

志尾直久

口説さげの中乃月と年
くまうつしすしおとおあう
番あしおあよとをむ
さふふとさあすらん第根山

市村氏鉄丸子

傳文いびりしきりのく
あやとくふあやとくあや
はちうぬの声響乃とる

あきん南朝四百八見目
塵あ^あくた^たは^はら^らよ^よ上^上み^みね^ね

あきん南朝四百八見目
大火のふりむきあ群公
あきん南朝四百八見目
あきん南朝四百八見目
あきん南朝四百八見目
あきん南朝四百八見目

因土洗ちれ大坂のさき

米のねん上、あゝせけひそわ

栲てそろいひんとそおま

はま、懐身うまゝの根を絡て

ふのふふも入ふあふし

と味縁を極川より引之し

木の下は^陰はねるひすめて

寝首とて法人志すすとねま

一西いふすむ軍勢

焼豆腐判下是を因りし

前中着のうねりけり松

はくらのいし描はんいともおらて

ぬす人えたう山をきり

急雨ハ親兄やまゝあへし

火老の門ハとん牙髯

獄卒の利銀と責は声介て

こいあま^たろふ^たの枝げし

抱瘡の山さうして海あへ

このあ^まの世考^まの去風

沁^りを^りのむろ^りや^りゆ^りん

ひら^りけ^りの我い^りら^りし

を^りみ^りの腕の^りま^りあ^りは^りや

議を題^りえ^りよ^りむ^りあ^りの^りさ^りふ

地^り首^りせん^りあ^りあ^りや^りま^りは^りん

まろしやをゆゑん

さうすむあはれはちうしん

あはれのやまれぬ借物

ゆるは梅田のあはれいぬ

あふれとあふれといふん

あふれとあふれといふん

卒於はあはれをいふん

鉄炮もあはれはあはれいぬ

一葉はあはれをいふん

あはれ二斤をいふん

あはれはあはれいぬ

武田氏一笑

七十のうらまゝいふん

あはれいぬのうらまゝいふん

あはれいぬのうらまゝいふん

あはれいぬのうらまゝいふん

あはれいぬのうらまゝいふん

あはれいぬのうらまゝいふん

あはれいぬのうらまゝいふん

あはれいぬのうらまゝいふん

正原忠と

急雨のあはれいぬ

あはれいぬのうらまゝいふん

あはれいぬのうらまゝいふん

ふおもしつゝつゝりる後
意不ものせき世をや親す
あゝい乃みちろは言木履
おとてをすみよあものお
うらなつてあつてうち死ん

東菴氏昌法

又われうらまのゆすえ
あつたのまはこはあつた
水戸をにちしよのゆ茶
おとひおはつていかに
ふろろろろろろろろろ
科人のうらろろろろろ

阿鳥やせあつては昔をわや
はりりあつたあつたあつた
袈束の上をわあつたあつた
宇江舟もすつた水とり

うらの男よあつたあつた
馬豆をたみ日のあつたあつた
まねよそのあつたあつた
目とあつたあつたあつた
各勢巴石

あつたあつたあつたあつた
庵下あつたあつたあつた
たのうらあつたあつたあつた

何身はうらやまあるはらば

肝つたれあふま風そあく

清きいりまげすやうまをいなり

は祝まつむまねもこれに

醒るま平あり橋ま口あり

お夜のうはま三輪のゆれ

まれ目や夜にれも登みまに

大橋氏古梅

忠のりゆま及まねとせ針

ろこのままま一人く出中

ほ見お見くま雑考神

あんの初者のあまをこれこそ

病人もぬいけをうて中やう

天上天下ゆの我毒くら

か藤氏我矢

おむや枝の下枝ままむむ

金てぬみまなうくひまのま

長珠教も約のま珠も引き

なえら一ありし跡路の存教

は波あをとおおあついのれま

髪をあまう入床のうら

徳かうやまむすまう古明

竹つらの一方いん成就して

るのよあまうままねのおれ

小豆もろ太きかゝりぬもみ合せ

は焚ききり上の腹中より

取おの様解りたれむつと

あつちの口はは乃くそ

めつちを上下万氏をよあへて

小豆梁葉

さしきしてはは入行を何ぞ

一丁らつろくあり明の目

あつちをひき^谷星の戸れに

鉄錐もね樹を子粒よくらぬ

月も日もあつちをばは標上よ

小豆もろ太きかゝりぬもみ合せ

よみかゝりぬもみ合せ^{中着}

けつちおもふこもろ乃杉

あつちのこもろ乃杉

けつちおもふこもろ乃杉

大谷氏名^谷

二人ぬの床のおもみ合せ

かゝりぬもみ合せあつちのりね

すてよおれはもちろの塩海

とを志をまのりうちよはなれ

かゝりぬもみ合せ

おれはもちろの塩海

とを志をまのりうちよはなれ

物こそしるししるしあはれ

舟のまはちあはれいりあつ車ちん

一もいんよほほほほほ火

ひびくものと同みよ一宮治の里

親音と慈悲をお使されお

もいさのひりよいふは貴院

田とつりやと孝の一一一や

松の木たおま家乃一人めきよ

村上氏樹友

わんや一しん恵院大馬

くやといは打のせん納戸こそ

大巾着善のあつんかきりた

平針と志めちうけはつよけも茶

小久氏一志

まの雨曲と秘神とばいせ

梁はのりんつをゆれんぬ

入住氏西本

ちんやよみれ海つこのせ

よ高同原平やよまひひやま

岩存まき吉

かーむこれのうらむ

かうやよはせといふまを孫かや

はしんらあつたみ目あのを

よまのよよいあつる伊約山

木尾氏心計

風おけり起つぬつききり

むねのなかりのこゝね火用心

久せ貞く

廊をも明かりのきみさく

うほし多きあつ片乃や

流は比ぬ

千としもねんねい

移目よまのあまの良^{ハナクメ}も

葉むし敷入

ほろく時ああ

おのいふ有孫を縁の客今

仙石氏口弁

おとろよきりぬ^え下さ

小倉山ふまの麻乃肉食

膝員の増を明は国の戸

智も一なみ時乃声立て

糸くち区し

下版枚の下枝よと

井上心計

新酒は茶や素は

平家の一もん

むすひ水の氷の

油ひらて瘡も

南枝は——

無言を同じく去風の音
いづのちりちりみとこを成まされ

大谷氏随友

山あしあしのことろ——あし

三味線を又引ちやゆれあま

をしておうちよせんいりあみ

といちよわしていぬちね浦り

あられなりりりねたなりりり

りあはく流とあしひくさむけん

名えよあつてさふらな家

船安もけししやうのものと思てんたり

野田氏いりあ

とものよひるるそこのようち

虫腹中ねの糸は枝とねく

神もまといよちき米の直

天秤と取してあつり流おあ

学文のいり笑ひくあしや

娘子の格物ちやうはくらん

其もは人今をあくひれ

拵持方米右持五本はくねり

ひろくみせら跡子の徳

赤い——とよあやまつたれて

さしものすりしあまの遅りこ

村井氏疵元

あふあふ〜 傾きのうち

あひ新の竹乃一む〜うちあひき

山崎氏一

眩眩い〜も〜〜〜

うげ〜〜〜〜〜

あまれ果〜るみのなははの坊

三味線やき〜〜〜〜

障上再おほ〜〜〜

袖戸の須知法おろしをま

上下的の身の手む〜

あつ〜〜〜〜

おの音〜〜〜

わが〜の〜の〜の〜

山崎氏一

時の音ま〜〜〜

す〜出ふ^{拾九代}松丸の度申まら

武た文たは〜〜松丸

怪の芭世よ眼さ〜

老内や〜ひり〜

わち〜〜あまの羽あるも

はの〜〜〜

梅り〜〜〜

いなのうちもすみとめの袖

やまうてくくれば木これの里

刀の疵又日のあはれを足して

山田氏家之

アんとそくあま風の音

目らにあいの丸をうらはひ

心あつてそひの津をらん

うみそりの磯よあふりもく

御鬼さへしむむをの修羅を

あつ骨五枚甲の滑を止めく

神も聖をいふねとまあや

うまはらう肉公へてめりまう

大名と極東のふくと

あ十方ろる変定は生

あまの海にも神の徳なり

花葉もつ敷まよつて大醫術を伝

心耳はすもんゆまのまれ

とら坊とくして其声おして

揺人の夢をやうはあか

めりまこれ松ま丸のまげりて

湯河氏家松

雨やしの立かまなは玄園り

なんち名のりをうつれのこま

光をさあつ木はくの上

あはこまな春日の伝まわ

ちやうどあまのりうりも
御旅のつかひをぬくまおひき
人よた昔よ文のちうり目
そつひは海士の釣舟を打せ
あつたつたに風白の拍場
下帯をけよ流^{紅カ}澄まとられ
あつたつたちやあひの流も
せんし柔くうく流流つ山
けいもあつたつたまやなり
せんしうり目と流ののりの声
名を埋ぬあつたつた
此布いふも野外まきすた

作が^{紅カ}不点取の内

尋ねよ流流のちやあつたつた
追原氏忠俊
不審流をもま古流のちや
早稲氏一隅
流いりく柳梅をこまあせて
東菴氏昌法
七思ふれやけりうりひん
のあつたつた忠
酒のかすまののまあつたつた
大谷氏随友
甘泉庵うりうりあつたつた

引ゆるを氣とおもふ茶うす山

木屋氏心計

とりのてねそけく一心寺

大谷氏随友

うしちま大なる大悲の灸をす

のふつ忠と

けいもかこも見説法

田友と吾が

志満り入平余の母孫り

腋坂氏朴之

ふちのや舟をこころうして

及ぬむを目かぬよとらん

三木氏紫舟

雑雑もあらし地浪の舟よのえ

すみちあふてもふのしん

木下氏双古

味増けくさるる家の志とら

秋さぬと目よはる水囊に

若田氏子琢

おもしろと見あかぬの松の影

けいもかこも見説法

佐木氏茶や

ゆきひうとを茶のしん

米控の鎖いさ間の心あろし

只玉もさくれをまてあゝめて

あもふくれとてあまき取たり

ひら子つあぢむ肝掌のむの巻

仙ももといひ振ぬまうし

具足がやうけいありある様

罪業あまきけうつまの時

受くまき人參をうけしひら

西岡紗脚もすまよ但す

茶の湯者い城南に利体よ起て

甲胃の皮膚病はあきり

さきとすむ敵の大食

一筋やうの天^命をけうて

あれたまをいひんはうのみ

質物や家のうまき方のまあ

尺物いりあゝりいれ城

うみやあゝりいれ送の歌

小松原中膳

杯をばふを目をををらん

さうまやいれうつ浪のむあ切

よんはふ声を聞くあき風

麻衣木君あくれをひそり

君代いせよいせの棟より

赤飯いへもこけりむすま

佐木まを賀

是や限と一帯の小あや
も尺よ花の山の嶺くくし

あふむとんや風虫の声く

あやめらるる風月こらり

連懐くくあくくつる数寄

いばとく尾を浪もひらつき

あらしも米もつまぬまう代

そちんよ二万の数人おそひて

あつよ飛も鼓もつもめて

あの世は鬼乃ぞむね借銀

まま右のうちへ水をおす坊

将基の檀よいさるをい下は

おんまふれせ生地の智慧

片是よるをのへる地差せん

あやしとともむは説席は園ち

又家よ逸井片是何坊と糸

秘術をつくも大坊の傍

け文を粟津の江よ追つめて

あのみ乃らひるもあ

大象鼻くぬくぬく人り

雑波まよま

大おほいともむは法重おれ

小豆もあはすすえこのませふよ

あやふよ一はあふまのふり

夢らうばらう米金のうち

代と取て廿日胤も一むう

小扶杖持も定ふき世の習うて

生者必滅く者草履とり

わつまのこれけいもんや

今もなせ孫とあつて木曾確

もつらつとほたのうん

最茶師後の山風療治して

地黄せん平お利益あやう

親のちあさもふいけ界

かひきよもやうらうり

五芒の名れわうらう后まは備ぬ

杖つくくくくは醫者もつい

平杖のよこし凍梨のふ地

やも縁もやうたす

けや隠しう悲をたれも

す 田氏忠眠

もよ襟とてい孫をさうや

志るふく平家消たう

よの目乃あをを幸あうらて

田名音の又ぬの声寸たわ

よ徳よのすく杖のむうわ

鼻紙らせぬてひんよ

わつらうのころ音隠乃あ

出入すぬ根の夕暮れ

のうらうらと暮のうら風

水の粒やはらげりもゆるん

神とあはせけぬあつ風を

ふむく酒のよみれははら

中よとらぬあまの逆を

しつみやまねむしり声

音ね山栲向すれ滝おちて

吉田氏あるま

取道をするよまのうみや

ゆあらしとまつてひらいてらるる

一軒建立あるおれははら

あてはくくとも君うわつら

頬髪はく丹誠をぬきつてし

城と相立取坊

敵を防れ支ぬのもの有り

鉄砲よん子ばをこり玉様

沢お氏もま

軍評定とりくのこゑ

馬玉や雀もほてやいふん

あま田言ふ

松東の岡も錦や下りけぬ

あむあはれんことあはれん

長珠敷や摺合く新新松

うまぬ洗ぬぬあまふあり
又た島下知していくふあり

横内末の里

子をおよあ坂山も近れや
ばりぬまよせしむわりの物
か限者もあつ一時乃声
食普請下固り腹た松ぼりら

上は和序

手鞠はけし物とあまふ
う乃湯本も存いわく久
みし絵に此仏えんの天舟り
胡粉ろくしやうをせ復生

かつけの及りくそいわ酒
熟地黄是も業を富良よあ

池上宗定

よりりばてくるた逆の袖
痛も肩こころほくの振こも
は使や対は念仏やらん
餅を入とれを縁わつうい
大まにえあけ

世のおもげくは胸をいりあり
伊達山袖松を雨の降よて
身ひついでやうとて将書お
質いふれくま揃よれお

ふまよせんとおもふ路沢
肩持来おもふ業よしうあや
その山出茂松のしるを
立派茶のこまのまのまあり
自形を吾々のまをねん
鏡をぬれくちの鏡よふ

田代ゆき

関東へても足取すは
口紅をさあつはとのまを也
無念をいほまあつらら
竹をたもとをとくまんとくま
ふんふし直

孫助の母をよおまの師
十成の翁^{追善}をよまら

秋山権子

あつこは感陽をよまら
媽の金銀をよのまをば
あおあはけくあつら
あひくは思むらりの原
こちんまくこわれ後の鏡
おあす茶碗をよまら

釋山法し

目くらりつきてみぬ佛像
三舟の酒やまあ

昌隆 正辰

あつれ日奉つてのうきまの
官判とくろのお痛は押付て
志つてくぬたをゆるきぬく
物付はけの中の間引をり

九河のあすけ

苗代まよすむむの時乃声
滋くうつて出ふ百姓
とつて引をせあふ中
あま肝のこねとけしぬされ
花より花より恋のまふて
あ督らひまよき大将

池上氏充定

養父とやもはすまの風
らう一たら氷のあきむ
威あれさきくまりの下風
そま是はと出かひの聲
ふむ又なれれらまはるら
普門あんで二十月の質

田氏あふま

はまむ山垣の山乃秋う勢
汁の宮は麻乃まふまあり
はみの子もあまれぬひ
四火五火を勢あすそあま

あつたを見ゆれ天台乃峰
唐瘡を白めつる洞よりつたれ

秋庭氏養節

長音話物卯のむれを盛

木くくろくく山回とま

出木坊る南男の寝床又

神代をこり筆の油竹

老前の周は落敷大石

盆の上文曰と園ををやばく

家なまむく山下風をけ

くみそれくゆけりあふる

就見之

香佛すあま神の作られて

笑ひ子方まやぬの声

見わたはな物事ささお肩て

室かこよふまき奉かを物

名もさくくのまの海魚

くはまよつたあくる南を

若おの故合と務み方支

高しま一巻

足ちゆいびき秋のゆあれ

足わたせいゆふまきあちちり

ちんちちちちちちちちん

くらのさくくくくくの声

佐木升中

あささうまけつらまのほま
横やまの岸よりなるもつら不
子語又木の葉あちがれぬり
ほろし中やあしえし海月桶

山下雪竹

秋かのは前よまはままらわ
おもとを秋女さけゆるして
と砂地の未定なき身躰は
いんさのやけはまのし声
次のおまめくあし又あまり
木曾とくぬくとおまあまら

伊達男も日あつた水着て

浪 昔乃ひげやはこん

村氏玉明

一回よふまのきをばりそ
うことしふとあふるる線
脹むやえ神力の下とえん
わけいつらとら針の音
出たての衣とま
沢しそちえん天の香久山
おまのあしとちまおとけしり
やちあまの腰のま

三宅周菴

雨はあつきの時やほつらん

二一、えんさくの五月さまより

のりれちうらつよき骨こ

ゝ紙や三人をりよ十五米

結付いあゝも民をほくれ

柿ともつてや周を志さふ

吉満氏一河

都をいあともまほりりして

ぬいぬは足袋くゝ河の園

とひ口はく水のゝゝあ

焼ともき根のきも消よそり

雨や竹の先よりあゝらむ

よこありあゝあゝくむきん

ととよもすむあゝさうの奥山

目安事よ代の古を伝とめて

おふりてゆくねを師

大鼓とふいあゝあゝらむすゝ

おきて風のあゝらゝら

王城の鬼門とちれ番太郎

ふん毛より久

と急雨のあゝもすひぬ飛人お

地ちとけりて落れ木々のあ

押ふゝ个なる長崎の船

以城と伝らちあゝらむんて

松のむくもちきりき小使
明神もあつたれ竹取翁のい
初まふ山より山よりくねん不
納戸より寝みよりの奥
言甫法一

夜寝涙をろえの上ま悪なり

人間八九七中乃あき

神垣ハ下の松お枝木

いづりぬえておきれ身紙

ぬね即菩提も志んば家まで

げしやうのくみろふよあ

あこふ立ゆわ わよ口

西勢は其外西女ふみ指さる

小沢氏宗的

すみのあちまよ正月の礼

雑煮にたあしの膳をさるあ

香山法師

毛の上を務持るる宗あり

こふ乃養女なまをさるらん

一柳を門

一匹の所行いさるものえ

念仏をうの人をへちやう

辻氏自取

紀玉れ家申をさるあつ

ろの蕙冬酒垂りて丸は
宇放り法を海そこわはる
兼すきき誼識の帝此おん時
かゝりはく人乃松むしーの声

より准松子

正家一山一幸の松ヶ坊

定紋の行ますめに一ふきて

ぬめりまの夕越るを泊瀬山

うす花ささくくくれふあめう

上田氏三子

志兼すああらひー中

うすはらふあめきき高女記也

山本氏一子

如合其勢が百八の珠数

うしりりも前中をと追をり

貝や自足

流沙にやそせまをやりつら

夜もあけうふー泪乃枝さこいゆ

笠井氏を悦

鏝の羽袖を服めうして

骨を老よわねをせけひりり

三陸ノ風臨

まのやまお茶の盤を積る所

ありーおつら力もちたる

飯田氏利久

すてよ地獄は落あゆのす
ほあはらよ洞のつめとききて

伊木氏正休

顔板をろきあけくこの月
家太被すわりのてんやうめん
柏子とああらあ引の山
ふまてたせんやよ風の声すや
けりくくくと落れあつふ
あひはやく葉のたれさうをすり
まをそそあむ難波の足相子
ありしうてうら狂言

の大帳ひくお根山

於合こを勢くふ
物軍のまうひの桜咲よそり
のくれあさるやまもの魚
てつまうい洞をまて五徳ま
をふてあまをた橋の上
け糸糸糸の西栗の木けりら
ゆあさうはすあんあは
長刀をあさう小野のまこり
あま真いあまあめん
前給よ
大塔の字古を九万八千回

米けりこむひんのかつち
塩あぬ海も押さるるおいら
うらちとすらすらあひのき
よいき話をもあつらひの目
洞下傳ふよれお家のむすき
いやさい老の明乃取あす
あつせんかまゝ庭をれめし
志の抱ゆるくろく一息きえ
山道のまくりさうむしの朝
平井のり孝
閑さうく木の葉おちる音
粉葉や尾上平尾おらすん

皮つぎれ松い ーき床の内
卓乃音がたあつらふ乃声
聖代い人あつらふ成よそわ
くの火種よる原アんの足
新さきさけらよとれぬとら矢
山さう山の尾よとれぬとら矢
くされもあつらふあつらふ山
其蠅をいあつらふ社あつらふ
有松文松子
洞あつらふとあつらふあつらふ
人間のいあつらふあつらふ
無く入るあつらふあつらふ

ふらふら扇を扇て是をこき
借浪次第よつともる白雲
浪人々々の津枚埋きて
ひきかきまき成り草の陰
げんまついてわ郊原まくらぬ
火宅の門よ申やまらん
瘡痕生老病死うつりまら

加古古氏仁有

鳥々菩提の心をあらはる
坊主りありし松樹の枝
扇を月よ出ぬる子花脚
おを日りつらいて衣うつなり

志願中

のれり野のちのは仏事
焼豆腐我まきとれ減ゆる
又うちよしてふとありたり
脈筋のぬらつらのちまの声
かみあかき悟徳もあり
かごとくつらとをい曇といせり
暁のくぬまこきすりなら
とらけ美をこめすものり声
いほ目のおは出たれたら
瘡痕を推もたき人の心
いつの浪人なりて

刀質津々うけすも成よりり
あうみうふまゝあふの敷
塞の目に刺と成てもよまみあ
むうしく大岡時代の秋の風
前縁よししてもなる桐の葉
やうる如く

池水もお菊よなる那をち
慈悲とこれよりお柳の糸
儲も悪人を鼻をひひぬ
たうくしてんて火よ入夜の虫
え磨えん子あま風をうき
弓勢も門服のいふ葉音はて

子音は

五月五日のよらむつと
昔蒲刀は牙いあふあかん
杖の下杖よこはあけつ
身解を天狗と成と成り
おつてお登上せしあん
あれとそとをと疎あやうし
ゆる氏尚別
先陣をゆとつとあふ
るのほとれこ伝の中えん
おまする我身つゆらけめ
あふのよらむつと

おろえハあけ風さりを声
小信後にも老るるをうて
沖は風ゆひのそまありて
よりく原浪を志ろきこゆひ

る切氏法宗

眼のおまうりて座やうを
空を鬼神は捨た所地を
ほくくとそれものぬ

芭蕉歌又本意の陳は破り

石原氏正成

ものおもとも四五分はけり
志れおれとそまあなる金ほき

七尺さつて僧正の谷

山の屏風もとん絵は長波也

如流法一

二三律を考は豆の青

おろしおんえはあつこゑあつや

雨のあつぬ世間もせし

有三人花を遠安よとらり

は所くらひをうてやさく

尔時世間もろくの皆あす

こませどめは食のさ満

三味線は因果をうて引れ

横山利長

あはれおのふはるきき
つゆ二釋迦三月のむ

か依はし

浪はちつめり船はり舟

ぬれ米のあき法りやよらん

戸架正直

うしろ拍子もはせやまなり

刀くらりあそこころの音より

杖はすりりて入ひえり山

むさひけの花はら峰へ八担

天つ下りえ番まひひん

火用心をこまきのおそよらあ

寺地壺巻

水の水はひそく身は

吾隠い難外難紙ありす

ふよ振神代ささぬお子

うくれおおの水入もうあ

如流法

おんま後とまいの山は村はれ

伊原氏光

後くよ引ひきもの事

尾作を三回をりよ十三ん

われらうく紙城の中

三味線とゆ一倍一引す

素門如意

海からよこした油の流りさ
ものあつ女のこころを嘆きし
金輪の恥をすすせ給ひたり
えんもくうはく越えかうせん
お心法し

よしのはよあられのあり
もろせえ丸裸あら姉背山
るる飯茶餅
諸火をともしこれぞ招物木
豆腐く九刀をさいうちあれ
かきしりまき

濁りのありまかど成よたり
かきしりまきむすめまきね

万代菜のあ

よよよとむねはあけ水も
えんはなはらう其まむいおとす

日下三子歌

母かあは胡蝶の茶ああ
まじり成ひくねこのまあかり
あ門う観

よちよちのほこの百姓
わらわちあまのふ屋根まつくら
しる杉山志

やまのうきしづくみの上
重なる我のこのもとにん

よみ人へん

むしやせんまのちつこ山虎

うしやせんまのちつこ山虎

矢野氏を記

あつせめてうそをぬらね

いよよんめしなめの重ら

山田氏玉道

幸助安の文字まうすとい

せんごまぬみのりをけり幸作

さかよもいよあくのいれり守

あやうくたものねれしむう

毒をいよけはらうり明日

いよけはらうり山田氏の里

待地は記このころあつて

身のある果はせんういよ

さかよもいよあくのいれり守

長谷河秀也

あつせめてうそをぬらね

いよよんめしなめの重ら

あつせめてうそをぬらね

いよよんめしなめの重ら

あつせめてうそをぬらね

九折柴 志がきと直

金出地

扇の風よつあぐみつあ
らんくち目もこれて出ぬん
おきんの坊は秋風をうく
坪もらのますりの為これ合
吾臣の口を津もちうつん
こき屋酒とあうらのこえ
うみようしうけりちく酒
わさしのおやうひちあぬん
大かいらつまつあまものこひ
中よはらあけふ希の出情

志がきと直

秋風をうくあせうちまら
もみうらうぬまの松一本
清見の清はまは使老男
其まじつこいふあいのこえ
横目と海ろよつた日生
市町をみ解みりこもるねあ
後ねんはなわすをさかせ
ぬす人もうらさぬさ足は
河合勢中
似城をうらふをあられ
羨望うらうてけらるちい

うみあふ山神のしほりみすけ
あはれはすまはらうこしや

山岡氏権風

あつよあつよみなりたり
介あのおもつよは物あま
それう心まの山も風
はうくあてくおれのう
あま口の中みて声もあ
老翁のあひ八十はうり

原氏正行

我あま提の水よ味して
こしうんよはつる聖を

本馬行てふあさうらむ
城郭をたやあつる本馬よむ

子十おる貞

あひをそれとふ審子万
えんを道人者へけれあ
ふ扇をさるひく一袴
あまひやあたよの世孫人
女神男神あまいけあ
山皮をうばてあまをたて

木畑定直

妹と我あてのおけのあまや
あまゆいあまゆいあま

信より増干されも海に身を
元生哉すくふとほくらの貝
わり業を七日間のくこま
所の丸をよるもとちりや
終入してあまの呼声ひま
食はまも本の日影をひやり
ね枝よりけつる子柳先生
風狂しき竹入らのお海
障子紙やき意はてのこころん
ふ紫衣仲
竹の皮よりむとよれとあまよ
くくよむすあまのちのちのち

うらぐいとおまむひんりの声
白くみくまのよむもまむま
瓢箪くくくやあけかの
茶笑くり法新世常のまやん
休むよりもたうられ業平
ひくもとゆひ陰陽の髪といれ
寸白起は後成乃御
妙業を承て是をせんに
おをもつて志のふくんや
俵米や八宿をよむすくん
小書ひくかあまのちひき
つめあまのちあまのちあま

子の目乃松やま又旬わうし

志ばいよふめつら野乃香清て

うらよもみちやきおてせらん

むあふふあふの浪もさうくや

そ実のちんどもまふみえの

山口氏昨非

本の子下の子る習習ゆう

むあふふあふはえうつせんくう

はあはあこちやまうつらその浪

是非すふい十四五日の浪ひら

難ある細谷河のふれんて

大牛房あまきひの中一山

つらつらあいの海いれあむろ際

ゆ乃すそくようへの津波

よ水のぬれあらし石岸

揺らう巴の浪乃音もあ

家くの幕れ紋打鉄砲り

くまのまお皮木村長あ

者りつまぬ浪のち砂地

よもあかの病さうまふ壺武伯

慇懃謀ふ出一月うそ

すうひは凡し声乃秋もあ

おまつし高音のさやけた

木刀や糸彦かひの玉あつき

水便まさ浪あする桂山舟
習のけりしれあまのよみ声

一時好亭日記

(三) のちあ〜あまのぼりて

一時水帷中

能若夫都やゆせたらん海

子紫常仲

中よりすれあ〜いその浪

山口昨冰

く備いふあの松をこえ音つれ

ちぢら中

矢ふちよおし〜まを山のちぢ

よ〜田氏松宅

任吹の谷れ戸障子もと坊

雲守けい合は残りてふ枝の関

山口昨非头

か〜お此世六條のよぬまき

一尺の人ぬをやち〜ん

ちぢら中

ちぢら女芝居は梁よ入せ給ふ

一時好帳中

けちらあ〜いも〜し〜んわんわん

子紫常仲

血のた々山登す〜あぢり

あまの眼才三々轉

仙吟法一

お紫すゝ夢やさふくかす縁

うぶ長法一

ふ程の野へ乃ちのあゝを

ふ流法一

ふの場は白旦の目出で

又

細河言法下

まむきのほをみさるる花水

は眼紅色

くら木の穴よこもるな虫

は格昌地

灯をち原板戸のやぬけて

又

道進院殿

ふ澄、水あをこれて縁鬼つゝ

ふぶ長法師

の海んとすれをなみの汲あ

ふぶ澄法一

くらあゝををれてうつちふあん

ふ

伏見西岸寺よ三人と合

しる日梅おぬは師一

中巻ぬ

一時軒帷中

清信のあやうきの垢つら
久

梅の影は

うしろよおは山はとま

記は

鳥の巢を離すも子ゆ

又 三吟もよ

松山氏政や

あつめ三金瑞まで見酒

一時軒帷中

鼻つき合せは月友

梅の影法師

十娘若井中の白菊白ひきて

又

赤野朋し

とれんを見直に茂ら葉の菴

梅の影法師

あつめやあつめ

一時軒帷中

急雨のうらや声

又

一時軒亭

松尾氏殖舟

是ら又腰のさぬおれの袴ハ

一時将

きこえはくおとくも見詰所

少松原七時

初人浦のおよりまうて

又 梶山保友

かりや菊一文字留おの

一時将

うせさあひ乃袖垣の霧

梅の海

知れを作えある家をもて

又

肥お備おの云合り

赤野朋之

清濁り一河の末や友の海

一時将

和おのふふき紫茂の崎山

梶山保友

見其まに目かひあつと

くもつて

は

思存胤及

曆算より時雨降ある計毎月

一時将

けし引のこつて ぬ落葉

石原正成

山月や紅葉見入ぬる

又

とびらち中

行中さん恨より行て杜宇

山田氏も適

ゆめちろちろさおのちれ

一時将

日依ちん龜はくし海

布はくし

回

七呂村中

こぼれ雨や雲のまぬ

父陽菴乃寸

目の葉あるもの物も

西山次梅翁

将ちるる昔はちる梅ち

漢か言松よ上孝氏

一止真鈔

一時将

鳥海もひらうす

とびら

上を氏一止

即ち縄のともひやうのさる

展覧巻一三

焼物又酒埴ひを浪あして

うみ祇げのまふれきよ

て中まされり

若木田中武

此をあをまれもいつれも津音

字祇法師

ひらうし水のありあり

とてし

延寶丙辰三物

岳西惟中

生あう是をげある難考止

子此考仲

弓るの家をばとそこの所

木惣定直

上下のゆつてとそこのとまて

日

定直

毎波字無朝つ久君りよる

一時行

松のそひねのありを穂とら

孝仲

力持あらの声もあむ日に

曰

孝仲

俗下ふ縁りともや魯の初

定直

え方むふ十日乃雨

惟中

男さるもの強き者多そ

曰

一町好

女乳やんころもこのうらまのま

山口氏昨非

海もむらり人屠に穂れと足

本畑氏

筋うららよと守日の長宗

曰

りて

定直

上よあふまや子もくる松重

一町好

我よみたりきさまの米

山口氏

名の葉もばいん標の

つちうちて

おふく 昨非録

草の子も能殖まらん 雑煮

木燭氏

おんち様のあふかきあわり

岳西氏

想ふよふさくわらふきめて

付合作者

後二位家隆卿 一

前西相為家卿 一

前西相為氏卿 一

道水之院殿 一

水無津氏成心 一

阿野守実成卿 一

西行法師 一 新阿法師 一

お大御新朝 一 教心法師 一

空方法師 一 宗祇法師 一

宗長法師 一 仙吟法師 一

清眼所色 一 清橋島色 一
長頭丸 一
小和幸吟 一 松江雅舟 二
三
尾尾似船 三
伏見
西岸寺住持 一

山崎

新月卷字經 二

接津

西山系梅翁 六 夕陽菴 二
松山氏玖也 一 吉滝益家 一
升原系重隆 一 高川由平 一

梶山氏保友 一 藤原貞因 五

五野田

室利可存 五

河内

小松系中睦 三

伊勢

葛木田吉武 四

播磨野

羽谷清 一 五 眠坂朴之 一
藤田子敏 一 木下羽左 一
依木甚也 一 三 末葉舟 一

梨加位

中河原別 一

伎師屋山

伊木氏正休 十五 子紫常仲 十五

山口那非 十五 古堅中 十五

木畑定直 十五 有松文松 十五

平井範孝 十五 金出地正哉 十五

素門如流 十五 山田至通 十五

長谷河秀盛 十五 宇高如雲 十五

加古右任有 十五 寺地壹菴 十五

石原氏正成 十五 河合融中 十五

羽心大僧都 十五 井上長時 十五

桑原兼家 十五 一代宗宣 十五

一時軒帷中 十五

片上

志賀俊直 四 明石高介 四

小田栂凡 四 孫右衛門 三

子雲清一 三 岸右衛門 一

屏哉也

金陵山如之 二 分親僧都 一

伊原光明 二 日下三子 一

牛將

子均清宗 二 横山利長 一

小豆沼

小畑清一 一 吉田松尾 一

佐

原氏正氏二

備中松山

秋在養良 四 秋山樵子三

横内末雄 二 沢村重治一

家内

社目高年 三

西河智

依木多賢 十 雜波吉三 八

九河の少祐 五 原吉直

矢田部

大木正元色 五 同氏盛色 二

池上元定 三 同氏宗正 三

同氏宗定 二 尾崎正辰 三

上崎和序 三 赤山法師 一

智見貞之一 城瀬左馬 一

作所松山

市村洪九子 五 湯河幸松 八

山田宗一 八 東原昌法 八

加藤我笑 七 近原忠俊 七

大谷隆友 六 野田の宗 六

小河一色 六 山崎一以 五

冬勢三石 五 加藤野木 五

小見繁兼 五 同氏一守 一

武田一笑子 三火橋吉樹 三
 仙石鉄口敏 三村上梅文 二
 大谷岩風 二岩倉重吉 二
 井上玄計 二木原心計 二
 石津如砥子 一八位西本 一
 繁松敷八 一村井徳元 一
 因友無分 一愚侶一隅 一
 南校法師

久世

廣田貞之 一

因所鳥取

辻氏自取^三 志津准松^二

上田氏三子 一笠井嘉悦^一

山本一才 一飯田利久^一

薩广風樹 一貝也自足^一

伯所合吉

志尾直久^一

市之列松江

二見氏一木^一

阿所

一板手門^一

湊所吉松

泉郎子三三 一上巻一止^一

一葉野井中 二一扇水以志^一

丸龜

高橋一冬子 二

仁保

吉田氏忠昭 八 岡氏尚幸 五

幸崎一河 六 山下若竹 四

与阿河江

妙蓮寺玄甫 四 三宅同啓 三

岡氏吉久 四 吉山清一

小沢宗的一

三河

今村義明 四

西條

矢野重治 一

武阿比戸

清氏小振 一 前田未定 一

肥前佐賀

志野朋之四 今多所住他 三

石井如自 二

昭和十三年八月六日

